

# 第8章 計画の推進

## 8-1. 計画の周知

本計画に掲げている環境都市像「日進月歩 住環境と自然が調和するまち につしん」の実現、ひいては、持続可能な地球環境を次の世代に継承していくためには、市民、市民団体、事業者など多様な主体が、本計画を知り、趣旨や内容を理解することが、目標達成に向けた取組の第一歩として必要不可欠です。

そこで、広報につしんや市のホームページなどの様々な媒体を活用し、また、ESD事業やにつしんわいわいフェスティバルなど、様々な主体との協働の場を活用して本計画を周知していくものとします。

## 8-2. 行動する人づくり・地域づくり

多くの市民の環境に対する関心を高め、一人ひとりの環境行動を喚起するため、様々な機会を通じて、環境について学ぶ場や環境行動を実践していくためのきっかけとなる場を提供していく必要があります。

そこで以下のような施策・事業を実施します。

### (1) につしんESD事業の推進

市民一人ひとりが環境貢献の担い手となれるように、体験型の講座等を通して、地域や世界の課題を自分のこととして捉えてもらい、持続可能な社会づくりを目指していこうとする“ESDの視点”を取り入れた、市民団体や事業者と連携したESD事業を継続的に実施します。自然観察会といった自然共生社会づくりの分野のみならず、脱炭素社会づくりや循環型社会づくりなど多様な分野にわたる学習機会の提供と多様な市民団体や事業者との連携に努めます。

### (2) 学校における環境教育の推進

持続可能な社会の創り手となることが期待される子どもたちに対して、学校での学習の時間を活用した環境教育を進めるため、市民団体、事業者、愛知県などと連携した環境学習講座の提供や緑のカーテンづくり事業の開催などの学習機会の提供に努めます。

### (3) 一人ひとりの環境行動の推進

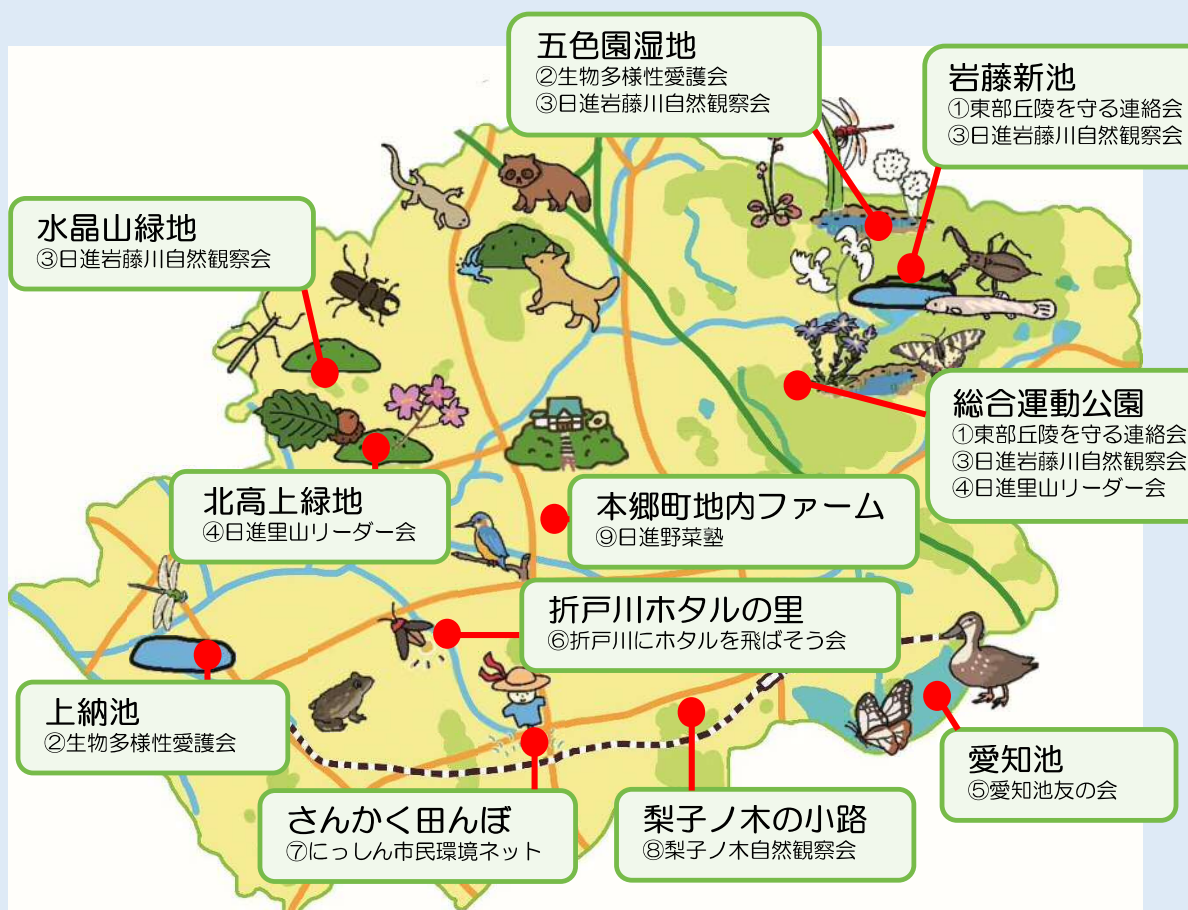
市民一人ひとりや事業者の環境行動の輪を広げるため、市民・消費者の省エネ行動やエコ消費の啓発、アダプトプログラムや公園・道路愛護活動への参加促進など、一人でも家族単位でも参加し、環境活動に取り組めるよう情報提供や制度への参加促進に努めます。

#### (4) マルチパートナーシップの推進

環境問題を解決していくためには、多くの市民の参加や市民団体、事業者等との連携・協働が必要不可欠であることから、多様な主体の連携・協働によって、相互の課題解決や相互の利益獲得、そして、新たな価値創造を目指していくマルチパートナーシップによる環境まちづくりを推進します。

#### コラム

#### 「にっしん ESD 事業」の実施団体と活動場所



●本市では、市民団体による自然観察会や自然保全活動が盛んに行われており、毎年 1,000 人以上の市民が参加しています。

●2023 年度の「にっしん ESD 事業」実施団体

- ①東部丘陵を守る連絡会(総合運動公園、岩藤新池)
- ②NPO 法人生物多様性愛護会(五色園湿地等、上納池)
- ③日進岩藤川自然観察会(水晶山緑地、五色園湿地、総合運動公園、岩藤新池)
- ④日進里山リーダー会(北高上緑地、総合運動公園) / ⑤愛知池友の会(愛知池)
- ⑥折戸川にホテルを飛ばそう会(折戸川ホテルの里)
- ⑦にっしん市民環境ネット(さんかく田んぼ) / ⑧梨子ノ木自然観察会(梨子ノ木の小路)
- ⑨NPO 法人日進野菜塾(本郷町地内ファーム)

## 8-3. 計画の進行管理

### (1) 環境基本計画年次報告書の作成と環境まちづくり評価委員会による計画の評価

本計画に掲げる施策・取組を計画的かつ実効性のあるものとして推進するためには、市・市民・事業者等の連携・協働のもとに市の関係各課が部局横断で取り組み、各事業の進捗状況を定期的に確認し、事業の実施状況の点検と実施後の成果を評価し、改善点を次の事業へ反映させる進行管理が必要です。

このため、「施策・取組の方針・目標や手順等の計画の立案(Plan)」⇒「計画に基づいた施策・取組の実行(Do)」⇒「施策・取組の進捗状況について点検(Check)」⇒「点検結果を踏まえた施策・取組の見直し(Action)」⇒「計画(Plan)」といった一連の流れに沿ったPDCAサイクルによる進行管理を行い、施策・取組の継続的な改善を進めていくものとします。

こうした進行管理は、毎年の取組の定量的評価と定性的評価により行っていくものとし、毎年、環境基本計画年次報告書を作成し、公表します。

また、環境基本計画年次報告書は、第三者的な観点からのチェックを行うため、日進市環境まちづくり評価委員会に定期的に報告するものとします。なお、地球温暖化対策実行計画(区域施策編)(第6章)については、日進市地球温暖化対策地域協議会において、その進捗や成果の点検・評価を行います。

### (2) VUCA時代にふさわしい臨機応変な対応

新型コロナウイルスといった感染症の拡大、地球温暖化に伴う気候変動、自然災害、AI技術の急激な進化など、社会を取り巻く先行きが不透明で複雑性・不確実性が高い昨今のような状況は、“VUCA<sup>※1</sup>(ブーカ)時代”と呼ばれています。

今まで通りの延長線の発想に終始しては対応できない時代であるVUCA時代には、全てを当初立てた計画どおりに行うのは困難です。現場に近いところで状況を的確に判断し、柔軟に対応していくスピード感とトライ&エラーの取組が求められており、最初に計画するところから始めるPDCAサイクルによるマネジメントに加えて、観察と状況判断から始めることを重視したOODA(ウーダ)ループ<sup>※2</sup>の考え方も取り入れることが有効であると考えられます。

第1次計画は、20年間という長期間であったため、当初に位置づけた指標や施策体系に長年縛られてしまい柔軟性に欠けてしまったという側面がありました。これらの反省を踏まえ、本計画では、成果指標や施策・取組について、常に社会情勢等を観察して状況を判断し、成果指標や施策・取組が陳腐化した場合やその時々によりふさわしい施策・取組が考えられる場合には、既存のものにとらわれることなく、臨機応変に対応しながら、計画を推進していくものとします。

※1 VUCA:Volatility(変動性), Uncertainty(不確実性), Complexity(複雑性), Ambiguity(曖昧性)の頭文字をとったもので、未来の予測が難しくなる状況を意味する造語

※2 OODAループ:「観察する(Observe)」「状況を理解する(Orient)」「決める(Decide)」「動く(Act)」の頭文字をとった言葉。その時々状況に応じて素早く判断し、意思決定していく手法

図 8-3-1 計画の進行管理の概念図(PDCAサイクル)

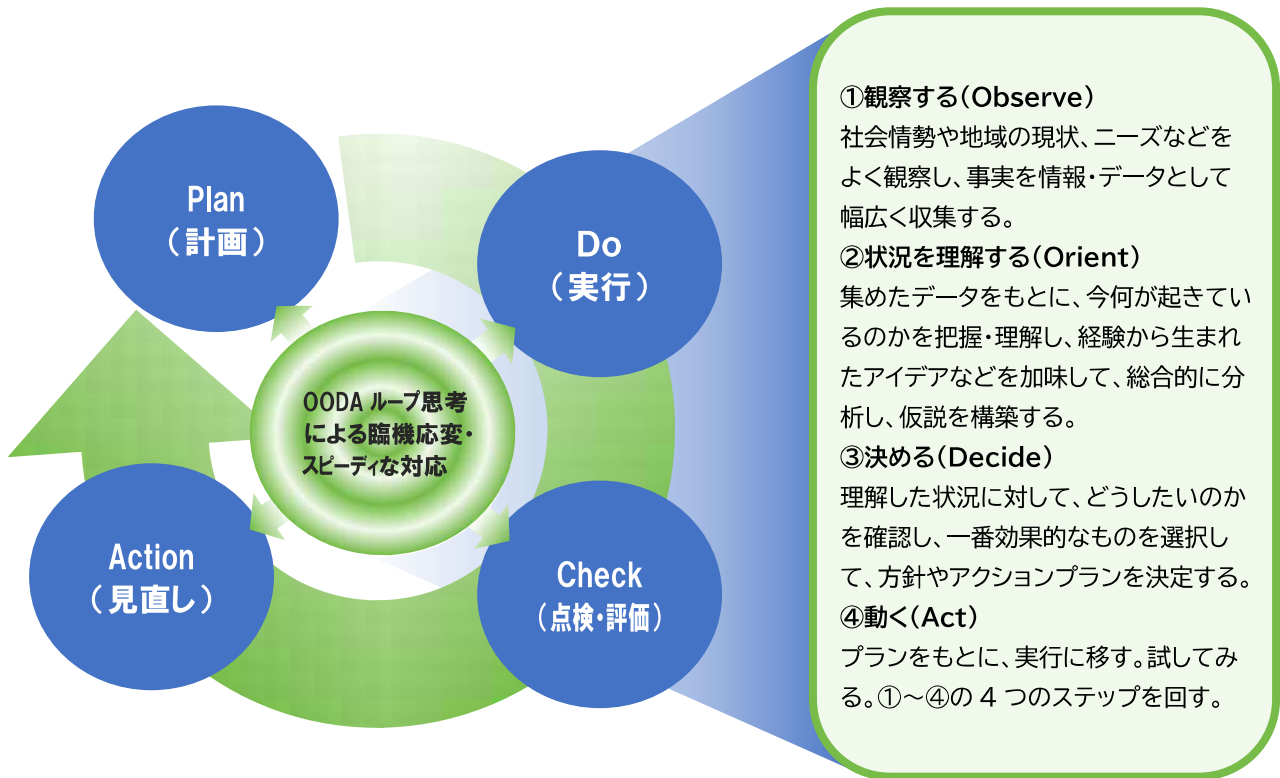


図 8-3-2 計画の推進体制

